

正法眼藏に現れたる釋迦牟尼佛

岡 田 宜 法

正法眼藏九十五卷の中に、釋尊に關する名稱が幾種類あるかを調査して見た。勿論、數字的に見たまで、はあり、概算であることは云ふまでも無い。従つて多少の見落しもあらうし、多少の相異もあらうと思はれる。

兎も角も、その名稱の種類に就いて見るに、釋迦の二字を冠するものは、『釋迦』『釋迦牟尼』『釋迦牟尼如來』『釋迦牟尼佛』『釋迦佛』『釋迦老師』『釋迦老子』『釋迦佛』『釋迦如來』『釋迦大師』『釋迦牟尼佛大和尚』『釋迦老漢』『釋迦慈父』『釋迦牟尼世尊』『慈父大師釋迦牟尼佛』『大師釋迦牟尼如來』『本師釋迦牟尼佛』『大師釋迦牟尼佛』であり、その他の稱號は、『如來』『如來世尊』『佛如來』『佛』『世尊』『大悲世尊』『佛世尊』『大覺世尊』『大德世尊』『大師釋尊』『釋尊』等であつて、太約三十種に近きものがあるやうである。

然らば其等の内、如何なる名稱が多く用ひられて居たかと云ふに、これまた概略であり、また或稱號にあつては、算入の上に甚だ面倒が附帶するけれども、概括的には『釋迦牟尼佛』の稱號が一番多く、凡そ二百六十有餘出で、次いで『佛』の稱號が一百四十に上り、それに次いで『世尊』の稱號が一百十餘出で、『如來』の稱號もや、其れと伯仲の間に居り、『釋迦老子』『大德世尊』『釋迦老師』『釋迦』『如來世尊』『釋迦佛』『釋迦大師』『釋迦如來』『釋迦老漢』等と次第して

居る。而して『大師釋迦牟尼如來』とか『釋迦牟尼佛大和尚』とか『釋迦牟尼世尊』とか『大覺世尊』とか『佛如來』とか『釋迦慈父』とか云ふ稱號は、甚だ稀に見るところである。

こゝに於てか吾人は、九十五卷の正法眼藏中、上掲の稱號が、如何やうに散在して居るかと云ふことを一瞥して、而して其れが有する内容を縷述することが學究的な筆法であり、左うすることが、正法眼藏中に現れたる佛陀觀を紹介する事になり、從つて吾宗門に於ける佛陀觀の概要に觸れるのであるが、その爲には多大なる紙數を要する所から、吾人は其等の稱號中、殆んど第一位を占めて居るとも見るべき『釋迦牟尼佛』の稱號に限定して觀察することにしよう。

『釋迦牟尼佛』の稱號は、卽心是佛、洗淨、禮拜得髓、袈裟功德、傳衣、山水經、嗣書、法華轉法華、心不可得、佛性、行佛威儀、佛教、神通、坐禪箴、恁麼、授記、觀音、光明、夢中說夢、都機、空華、古佛心、葛藤、三界唯心、佛道、諸法實相、佛經、無情說法、法性、陀羅尼、面授、梅華、十方、見佛、祖師西來意、發無上心、如來全身、王三昧、菩提分法、大修行、安居、陀心通、出家、發菩提心、出家功德、供養諸佛、皈依三寶、八大人覺の諸卷に散在して居る。

中に就て『釋迦牟尼佛』と云ふ稱號が、その數に於て多きは見佛の卷であり、面授の卷これに次ぎ、嗣書、陀羅尼の卷は第三位に居り、袈裟功德を第四位とすべく、十方、傳衣等と次第して居るやうである。吾人はこの諸卷に關してのみ記述することにする。

見佛の卷は、釋迦牟尼佛の聖語を引用して、見佛と云ふ意義に徹底せしめんとし玉ふ卷であつて、それが爲には、多くの經語を掲げ來つて、宇宙の實相を如實に觀破することを以て見佛であると結論するものであるから、諸法の實相觀が

が見佛であるとすれば、諸法の實相も佛でなくてはならぬ。この意味からすれば、かゝる佛は宇宙的遍在のものであることが知れやう。

けれども諸法の實相觀が成立するためには、吾人の主觀が實相化されねばならぬ。主觀の實相化とは、實は純主觀の如實の發揮である。換言すれば認識主體の佛知見たり得た場合、認識の客體も亦實相となり、佛となるのである。この意味よりすれば、實相である諸法は、認識主體の認識反映體であるとも云はれやう。

然し、諸法は認識の主體と無關係の位置にあるとしても、依然として實相たるべき佛に相違はないのである。否、認識の主體とか、客體とかの論議は、この遍在せる佛の内のものであり、佛其者であるのである。

このやうに、主觀的な見佛の解釋も、客觀的な見佛の解釋も、主觀客觀を包含せる佛に還元され、即せしめられた時に見佛の意義が徹底されるのである。と云ふ筋合のものが、この見佛と云ふ意味の大要である（『見佛は、見自佛にあらず、見佗佛にあらず、見佛なり』）かゝる見佛と釋迦牟尼佛との關係如何といふことがより以上この卷の重大なる關心の要點である。即ち見佛の内容は、實は見釋迦牟尼佛ではあるが、その實、吾人は元來釋迦牟尼佛と共住の存在であり本質的に釋迦牟尼佛であると斷定されるのである。こゝが前述の主觀の實相化や、純主觀の如實の發揮を必要とするものである。これ『たとひ百千萬劫晝夜、つねに釋迦牟尼佛に共住せりとも、いまた策起眉毛の面目を參究すべし、たとひ二千餘載よりこのかた、十萬餘里の遠方にありとも、策起眉毛の力量、したしく見成せば、空王已前より見釋迦牟尼佛なり』と仰せられるのである。されば見佛の卷に現はれたる釋迦牟尼佛觀は、これによりて畧ぼ知ることが出來やう

と思はれる。

次に『釋迦牟尼佛』の稱號が多く掲げられるものは授記の卷である。授記とは記別であるから、八種類の授記を擧げられて居るのは、一般的な記別の解釋に過ぎないが、高祖道の授記は、一般的な内容以外に深刻なるものがある。果せる哉『佛祖單傳の大道は授記なり………いまだ菩提心をおこさざるものにも授記す、無佛性に授記す、有佛性に授記す、有身に授記す、無身に授記す………まさに知るべし授記は自己を現成せり、授記これ現成の自己なり、このゆゑに佛々祖々嫡々相承せるは、これたゞ授記のみなりと仰せられ、或は『自己の眞箇に自なるを會取し道取すれば、さだめて授記の現成する公案あるなり』と云はれ、又は『この授記は釋迦牟尼佛と授記しきたれるなり授記の未合なるには授記せざる道理なるべし、その宗旨はすべてに授記あるに授記するに罣礙なし、授記なきに授記するに剩法せざる道理なり』と示されるは、人類の悉有佛性、即心成佛と云ふ完全性を認識した上に立てる授記であるから其處が一般教學的な授記と大に相違する點である。が然し、この授記の卷に現はれたる釋迦牟尼佛は如何と云ふに、歴史上の人格身たる世尊を意味することは勿論であるが、その釋迦牟尼佛を、各自の主觀中に發見し自覺するところに、授記が現成すると云ふことが力點となつて居るから、己心の釋迦牟尼佛と云ふ色彩が豊かであると思はれる。けれども授記の意義を深く、廣く解釋する時、そこには釋迦牟尼佛の意義も、可なり自由に普遍的に見る必要が生じやう。これまた釋迦牟尼佛の普遍性と絶對性とが附隨するのである。

次には嗣書の卷である。嗣書は室内の密授であり、嗣書の卷も嗣書と必然的な關係があるところから最も神聖視され

來つて、余等の青年時代までは上梓を禁止されて居たほどである。今この卷に現はれたる釋迦牟尼佛を見るに、概して歴史上の人格世尊であることは當然であるが、只だ一ツ重大なる祖語が卷の中に存することを忘れてはならぬ。即ち『釋迦牟尼佛は七佛已前に成道すと雖も、ひさしく迦葉佛に嗣法せるなり、降生より三十歳十二月八日に成道すといへども、七佛已前の成道なり、諸佛齊肩同時の同成道なり、諸佛已前の成道なり、一切の諸佛より末上の成道なり』とあるは其の一であり、『釋迦牟尼佛、あるとき阿難にとはしむ、過去の諸佛はこれたれが弟子なるぞ、釋迦牟尼佛のいはく、過去の諸佛はこれ我釋迦牟尼佛の弟子なり』とは其の二である。この語の有する意義は、蓋し二つに見られやう、一は歴史的な普遍性を云ふものであり、他は實體論的な普遍性を云ふものであるとも見られる。若し然らずとするも、絶對的な普遍的な存在とすることは否むべからざる事實である。これ等は唯だ高祖大師のみならず、法華經にあれば、涅槃經にあれば、華嚴經にあれば、要するに釋迦牟尼佛に關する限り同一傾向にあるものと云ふてよからうと思ふ。

次で面授の卷であるが、この卷は傳法相承の實際を説くものであるから、この點より云ふ時は、嗣書の内容を爲すものと云ふてよい。従つて嗣書は面授の裏書的な聖的な形式とも見られやう。然し單なる形式では無いと云ふことも特別に注意して置く必要がある。故にこの卷に現はれたる釋迦牟尼佛は、勿論歴史上の人格佛であるが、この歴史的存在の佛は、必ずしも時間的に規定される存在ではなく、修行者の傳法相承と云ふ面授によりて無限に存續されるものと見られる。即ち『この面授これ釋迦牟尼佛の面現成授なり』とあるは其れである。尤もこの文意は、釋迦牟尼佛の大精神を體驗的に師資面授するものとも解せられ、一面から云ふ時は正に其れに相違はないけれども、その外に全釋迦牟尼佛を、こ

の面授によりて現成するものであると云ふ信念が、最も重大意義として存在する。ここに面授と釋迦牟尼佛とは二にして一なる不可分の關係と云ふよりも、寧ろ渾一體として見ねばならぬのである。さればこの面授面稟の限りなき相續はそれが直ちに釋迦牟尼佛の不滅を告ぐるものであることは當然である。この意味からする時、面授の卷に現れたる釋迦牟尼佛も亦八十壽にして滅び去れる者ではなく、寧ろ永久不滅の存在であると見るのである。

次に陀羅尼の卷を見る。元來、高祖道の陀羅尼は宗教的に聖行である。その所謂聖行と云ふのは、宗教信念と宗教道徳との即一的なる實踐を云ふものであるから、具體的に云はゞ禪による主客兩界の緊張せる身心の活動である。されば高祖大師はこれを正法眼藏とすら仰せられたのである。故に發心、修行、成道の向上的部門は勿論、その後に於ける轉法輪と云ふ向下的對他的部門までも包容する禪的過程の完成が陀羅尼の内容である。

かゝる聖行は、歴史上の人格佛陀たる釋迦牟尼佛の教法に攝せられるのであるから、陀羅尼の釋迦牟尼佛は、主として歴史上の應身佛であると見てよいと思ふ。

更に袈裟功德の卷を見る。この卷は題名の示すが如く、佛袈裟の傳承に關する教説であつて、傳衣の重大なることを示すものである。故にこの中に現れたるものは、歴史上の釋迦牟尼佛であることは勿論であるが、この釋迦牟尼佛が過去の因地に、寶藏佛の所に於て、五百大願を發し、特にこの袈裟の功德に就いて誓願を發した旨が說かれる。これ實に釋迦牟尼佛の過去への延長である。而して更に『しかあればすなはち、世尊の皮肉骨いまに正傳するといふは、袈裟衣なり』として、袈裟の傳承が直ちに世尊の骨髓の傳承とされる以上、これ世尊を未來への延長であると見てよい。さす

れば歴史上の世尊は、過去現在、未來に存續する存在であり、無限時の實在と見奉ることが出来るのであつて、袈裟功德の卷に現れたる釋迦牟尼佛は、嗣書の卷に現れたると同様に普遍的な内容が與へられて居ることを知ねばならぬ。

最後に十方の卷を見る。この卷は佛土論とも見るべきものであるが、「我相、知相、是相、一切相、十方相、娑婆國土相、釋迦牟尼佛相なり」と仰せられる邊りは、必ずしも歴史上の釋迦牟尼佛とのみ解すべきではなく、其處には時空的に無限なる内容が存することが知られる。「瞿曇沙門眼は、吾有正法眼藏なり、阿難に付囑すれども瞿曇沙門眼なり盡十方界の角々尖々、瞿曇の眼處なり、この盡十方界は、沙門眼のなかの一雫なり」とあるも亦同様であらう。

然るに傳衣の卷に現はれたる釋迦牟尼佛は、全く歴史上の人格世尊であつて、この佛を中心としたる傳衣相承の由來や、意義や、袈裟の種類等に就て教示せらるるに過ぎぬものである。

その外、釋迦牟尼佛と云ふ稱號の存在する各卷や、その他の佛號に就て見るべきではあるが、それ等は前述の如く多くの紙數を要することであり、一大研究論文たり得るものであるから割愛することにするが、要するに眼藏の上に現れたる釋迦牟尼佛は、歴史上の人格佛以上、その内證の内容觀よりすると、宗教信念上よりするとの二つの態度が合して、其處に絶對者となり普遍者となり、而して所謂三身即一的な佛として取扱はるるに至りたることは、爾餘の佛號を各卷に就いて見る時、明らかに斷定されるのである。